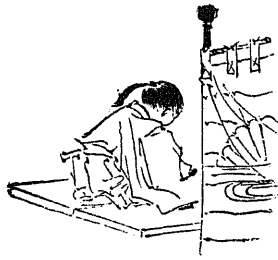


幽暗不潔の一室に彼等を幽閉し、放縦、喧噪、亂暴、狼藉に之れ一任し、而して敢て隨意遊戯の間なりといふ。滑稽の度を過ぎて吾は寧ろ幼兒の爲めに哭せんと欲す。

(未完)



海 水と陸との境

水の陸地に入込みたる處

浦、松林、茅屋、鹽焼く煙、漁船、漁網、さては漁火のゆらくとあるは欸乃の遠く聞ゆる

磯、波うち際に岩石の立ち並びて、漁翁の岩陰より釣を垂れたる、鵜の斜に水に翔けり入る

濱、平なる砂上に貝拾ふ童、潮淺き邊に海氣浴を試むる人々、

港、深く入り込みて、底深く、大船小舟の輻湊

せる、所謂文化の傳播の門戸たるもの。

川口孫治郎



水に陸地の突出でたる處。

岬、崎ともいふ、岩石、怒濤、直に聯想し來り

往々存する燈臺は、暗夜、海の悲劇喜劇を想
起せしむ。

水に圍まれたる小なる陸地、

島嶼、碧水に點々せる群島、絶海の波濤を拔き

出でたる孤島など、

陸と陸との間の水、

内海と海峡、潮流、暗礁、渦卷、亦以て理學者

文學者以外に於ても趣味ある問題、

陸を全く離れし沖、

灘、潮の早き、海の最も豪壯なる處、

洋、山なす洪濤の澎湃たる、海の最も雄大なる

ところ、

海上の觀察、夕やけ、朝やけの雲の模様、飛翔す

る海鳥の趣、水天髣髴の際西と東とに白帆黒帆

片帆、真帆など、

海底の觀察、地勢は如何に、産物の經濟上の關係

は如何に、暗黒界に於ける限なき活劇は如何に

更に麗はしき珊瑚は何處に伸ぶる、悼ゆしき白

骨は何處に横はる、など、

海面の觀察、海面の趣味は、波濤に在り、波濤の

趣は、變化に在り、漣漪としては、少女の微笑

の如く、狂瀾としては、霸王の赫怒の如く、斷嚴

に掩撃して轟然雪城を築さしそれは、時として、

砂上に戯れて喃々として頑童の踵を濯ひ、照々と

して輕舟をゆるがせしそれは、時として、黒煙天

を焦して奮進する幾萬噸の艦艦を、秋の木の葉の

一片よりも尙ほ淺ましく翻弄す。

夜はほの／＼とわけ行きて立ち昇りたる霧の漸

く霽れつ、鮮かなる旭にうたれて、光輝燦爛たる
春の海に對すれば、自ら優麗閑雅の感起り、

夕陽西に傾きて輝斂まり雲消えつ、さし出づる
月の光に照されて碧すみ渡る秋の海に對すれば、

何とはなしに清秀靜穩の心浮び、

脱然として九天の頂にうちかけたる大浪の、轟

然として奈落の底をえぐり來り、奔然として巨巖
に爆裂し、轟々として相呼應する夏の海に對すれ

は、誰かは雄大豪宕と慨起せざるべき。

颯風咆哮し、天地晦冥の時、船をも人も、盡

く激浪怒濤の中に吞噬し果さんとする冬の海に對
すれば凄壯慘愴の感起らざるものそれ何人がある

げに、靜觀すれば愈千變萬化倏忽遂に把握
すべからざるが如きは、海の表面なり、

毎一日に潮汐の交代あり、毎一月に更に大なる

潮汐あり、毎一年に二回の大潮汐の更に大なるも
のあり、而かも如上の變化は今日、明日、今月、
今年、來年、又來年、波濤の變化は變化として、
未來永劫に渡りて、依然として變化す、是に於て
か、吾人々類は、智と情との上に海の影響を受く
るのみに止まらず、幽玄極みなさ永劫の意的感情
の自らら養はるゝものあるなり。

東京市養育院を觀る

ひ　　の　　子

一口に花の都と言へば、いかにも花のやうにま
こえますが、同じ東京でも、實際は、土地と住む
人に由りて、なるほど花のやうな處もあれば、聞
くだけでも寒くなるやうな處もあり、實にあはれ
な處もあり、ふもしろい處もあり、又まるで暗黒

世界に生活して居る人、貧の底に沈んで居る人、頼るべもなくて世を憂いものと嘆いて居る人、世にもわはれな孤兒も居りませう。又之等のかわいそうな人達を救て、限りなき恵を與へて居る光明の世界もございませう。

小石川の宮坂を上つて、ズーツと真直に行きますと、段々静かな處になります、大塚辻町まで行くと、右側に、東京市養育院といふ札のかゝつた一萬二千餘坪もあるといふ大層廣い一構があります。こゝはたしかに花の都の内の一の別世界であつて、又光明の世界で、其内部をくはしく見れば見るほど、考へれば考ふるほど、一種の感じのする場所でありませう。私は七月の末に或日こゝを參觀いたしました、もはや御覽になつた方も澤山でございませうけれども、まだ御覽にならない方

の爲に、少し其中の事を御紹介いたしませう。此院は孤兒及窮民を救育する處で、其入院規則の大要中に左の通りにあります。

本院ハ孤兒及窮民ヲ教育スル所ニシテ孤兒ハ別ニ願書ヲ要セズ
區役所ニ申出テ同所ヨリ送付セラルトマナリ
孤兒ニアラズ者ノ入院ハ本院長ニ願出テ許可ヲ受クルモノニシ
テ其入院資格ハ左ノゴトシ

一、二年以内市内ニ住居シ獨身ニテ癩疾不具心神精弱及老衰ノ爲生活ノテキヌ者

一、獨身ヲナクトモ病氣其他ノ事故ニ由リ一家生活ノテキヌ者
一、重傷ヲ受ケ頼ル所ナキ者

之で大抵どんな人達が此院内に生活して居るかといふことが推せられますが、其人数は七百八十九人で、なほくはしく言へば、窮民が二百七十三人、行旅病人が二百四十七人、棄兒が百六十五人、孤兒が四十八人、迷兒が八人、感化生が四十八人ですが、窮民の内、幼弱者が五十八人、行旅病人の中で、幼弱者が四十六人なるとの事です

から、子供が三百七十三人、大人が四百十六人で
あります。

で、此外に三才未満で院外の里親の家に預けて
あるのが七十八人あるそうでございます。つまり
此養育院のおかげで毎日を送る人が、合計七百九
十八人あることになりました。

まづ私は大きな門を入り、玄關に上つて、事務
所を右に見て應接所に入りました、少時すると一
人の方が出て来られましたして詳しく案内の勞をとつ
て下さいました。それで私は此方に從つて、

- 幼童室 幼稚室 幼女室 幼童食堂
- 幼稚園 小學校 幼童工場 感化部
- 醫局 女健康室 女病室 幼童病室
- 男病室 男健康室 浴室 炊事場
- 食堂

などを見ました。之等は皆廊下でついでに居る一
の構であつて、之等とは離れて次のやうな處が別

々に建て居ります。即ち

- 家庭教場 洗濯場 隔離室 癩病者室
 - 炭團場 園丁住宅 肺病者室 物置
 - 米庫 工作場 會堂、佛殿 入院者診療所
 - 土藏 役宅
- 等でございます。

●幼童室、幼稚室、幼女室 何れもまだ幼い子
供であります、温い慈愛深い保母を、母のや
うに思つて、何も知らずがほに嬉々として戯れて
居ります、何處へ行ても幼児は幼児、どんな兒で
も幼児は幼児ですから、今こそ養育院のにおかげで
無邪氣に遊んで温かい良き空氣の中に育つては居
りますが、どれも之も、入院するまでには、少か
らぬうき世の浪風にわたつたものである、冷かな
人の心の爲に、或は棄てられ、或は遺され、或は
迷うて居つたものである、と思ひますと、此幼児

る處で、幾多の罪惡を未然に防ぎ、又未恐しい惡少年を矯正する處で、こういふ事業が世に必要であることは言ふまでもない話ですが、私はこの事に付て詳しく伺ひました。けれどもあまり長くなりませんから、此部の事は次號にでも記すことにいたしませう。

●女健康室 健康と申した處が、癩疾、不具、心神耗弱、老衰などの人達ですから、普通の活氣があらう筈がございませぬ。皆、一種の淋しい顔をして居ります。私は前の幼兒の室に入つた時とは又ちがつた感を感じました。おれは、此院で生長して將來世に出でようとするもの、之は又、普通の世に獨力で住むことができないために、此院内に餘生を送るもの、即ち此院は此人達の死すべき場所である、と思へばいかにもおはれな氣の毒な

情が起りました、併し此院の救を受けなかつたらば、此人達はとくに此世を去つて居つたでございませう。

●女病室 此室に居る病人の中に、此室に病に臥してから十年になるといふのが一人、八年になるといふのが一人ございました。食時には食事をして、あとは寢て居るばかりであると申しますが、一体何が楽しいでせう、と傍の人にたづねましたらば、食べる事です、と答へられました。なるほどこういふ境遇になれば、何も外に希望といふものはないかもしれぬ、ア、實に世は様々であると感じました。

●幼童病室 一兒一兒、寢臺の上に安臥して看護婦の温かい情の下に眠つて居ります。病室ですからいつれも青白い者、瘡せた者はばかりですが、

寢臺には、之は棄兒であるとか、遺兒であるとか、札が立てあります。父母の名も顔も知らぬ幼兒の病に臥して居る顔がいかにあはれであると共には等を我子のやうにいつくしんで、看病して居られる方々の同情は實にうるはしいものでございませう。

●男病室 普通ならば屈強であるべき男が此院に入院するさへあるのに、まして病に臥して居る様子は實に氣の毒です。

併し、あとで幹事の方から伺つた御話に由りますと、幼兒で此院に入るものは、大抵自分が悪いのではなく、大方は父母の爲に、こゝで養はれなければならぬやうな境遇に陥るのですが、大人であつて此院に来るものは止むを得ずして窮境に陥たものもあるが、自業自得で、自分の心得が悪いから

人の世話になるやうになる者も少くないとの事です。して見ると男健康室 男病室、女健康室、女病室に居る人達は、何れもかなしい歴史かふそろしい歴史かを持つて居るのであつて、無教育の結果といふのが随分ございませう。

●家庭教場 此院に居る兒童は、世間に接することが少い爲に、自然に世間の事情に暗く、且つ大組織の集合舎に起臥して普通家庭の状況を知らぬ機会がないといふ、ことを考へられた結果、教育上、又快樂を與へて自然の感化を及ぼすといふ上から、今から三年ほど前に設けられたさうです。其教場は、院の附屬小學校運動場の一隅に、一家屋を別に建て、垣を圍らし小門小庭園がある。庭の中には玄關も座敷も臺所もある。こゝには一人の女教師の方が住んで居られて、普通家庭實際の

事を教へられるので、普通學校授業が終ると、十歳以上の童女は交代にこゝに来て、洒掃、應對、進退、炊事を實地に習ふので、之と同時に毎日各室から學齡以上の童兒十人づゝを交番に賓客として招待し、其日に製したものを饗し、且つ之に禮節を教へられるとの事でございます。

養育院が東京市中の一の別世界ならば、こゝは又養育院中の別世界でございませう。

此家庭教場は意外の良効があつて、一般童兒に一の快樂を興ふると共に、禮節を學ばしめ、家庭の有様を習得させることができ、殊に感化部生に對して効力の著しいのを感じる、といふ御話でございませう。

●會堂及佛殿　こゝは門を入ると左側に見ゆる大廣間で、教誨師の法話、又はいろゝの法會の

ある處でございませう。

私は右に記しました諸處を詳しく案内された後、幹事の御方からいろゝ、有益な御話を承りました。さまざまの感を抱いて歸宅いたしました。

八月と九月(はつきとながつき)

せ　く　生

八月といへば、新曆では暑氣の絶頂であります。本年なども、所謂三伏の熱さの中伏末伏はこの月でありまして、實に夏季中の眞夏とても申したい時であります。舊曆では然様の暑さははや過ぎて、門田の稻葉打ちそよぐ秋風やうゝ立ちそめて、草木の緑稍々黄ばみかゝれば、空の緑のいやまして、紺青ともいひつべきまでに冴えわたり、陸奥の馬嘶く野邊は、一しは高い秋空に、何處よ

りともなく群れ来る雁は、みなみくと歸りながら、麗はしいたり穂の稻の田の面にあさるもありませう。

この月の名を古くから、「は月」と申しました。

其の譯については實に色々の議論があります。

第一に「八月は木の葉紅葉ちて落ちる故に、葉落月といふをよこなまりに「はつき」といふ」と釋解した人がありました。

第二に此の説を駁して別に論じた人があるのです。は月を草木の葉の散り初める故にいつたと説くは如何はしいことである、散初めるといへば、柳桐の類は七月の初秋に初めて、九月十月に散り果つるなれば、この月に限つて葉落月といふ事はなからう。月毎に「八月白露節の後五日に候雁來る」とあつて、この月初めて鴈の來るなれば、初

來月であるを「つき」といふ詞の二つ重なれば一つを略してはつきといふことは、「卯つ木月」を卯月といふと同じことである」といふ。

第三には又之とも違ふ説がある。はつきは稻葉月である。稻の葉が最茂る時であるから」といふ

第四には「葉が茂るといふよりは、この月は穂の發り膨むとの著きなれば、「穂發月」であつて、其の詞の「穂」が落ちて「はり月」となり、其の「り」も到頭脱落しては月となつた」といふのです、如何にも之が正しいと頷かれます。といふのも彼の「は月」なが月と共に秋の三月は皆稻に干係ある處から考へてあります。

又この月の異名も中々ありました、大方は書紀に基いて居ます。

紅染月(有家朝臣)

時雨つゝはしの立枝も紅葉して

紅葉の月ふかきくれ

はなと月(兼藝法師)

さりくすさはなさ月打わひて

浅茅か原に聲よはるなり

木染月(莫傳抄)

松を見て名をぞ忘るゝ木染月

露やひなしき色やつれなき

草津月(同)

色々に花咲いてこそしられけれ

草つ月とはけふあすの露

月見月(鴨長明)

名にしおは、秋の半の空晴れて

光ことなる月を見る月

秋風月(定家卿)

萩の葉に露ふきみたす音よりや

身にしみそめし秋風の月

九月(ながつき)

秋もやうく深くなつて來まして、庭の紅葉に

は、薄いのもありますが、深山は最早まつ盛り、

二月の花よりも紅なりと時めくに、東籬の下、さ

びしげに隠君子を氣取る菊の花も、却々趣かあ

ります。

澄みにすんで居る大空は、晝間のみでなく、月

三更霜もかくべき夜、あはれに冴えて雁わたつた

折々には、壯夫さへ異域に在つては腸をたちませ

う。まして草群にすたく蟋蟀の聲々が、老をわび

不幸をかこつ種となる事は、如何ばかりでありま

せうか。

斯かる中にも、さも情しさに、鎌を研ぎ、繩

をなひ、牛を逐ひ馬を驅る農夫等の忙しぶりは、よそ目に見るさへ心地よい、楽しい此の月の特徴であります。

さて又此の九月を何故むかしは「なが月」と申したらうか。勿論初には誰いふとなく、然様に言い馴れて参つたのでありまして、歌などで、

夜晝の数は三十にあまらぬを

など長月といひ初めけん(躬恒)

秋ふかみ戀する人のあかしかね

夜を長つきといふにやあるらん

(忠岑)

凡河内大人と壬生ひじりとの研究が有つたからででありましたが、鎌倉時代の末頃に「九月夜漸くながさ故に夜長月といふを誤れり」(藤原元輔)と第一に説明を試みられました。處が第二番に徳

川時代になりましてこれに反對して、「稻は九月刈り納めるからして「伊奈我利月」の上下の伊と利とを落したのだ」(加茂真淵)と説きました。

第三番目には「稻熟月を訛りて言ふならんか」(宣長)と説き、第四番目には、又別に「見識を立て、前の三説に反對したのがあります。それは「稻の穂が長いので「穗長月」といふのだ」(跡部光海)といふのであります。私はいかさす此の第四番が正しからうと思ひます。で此の九月の異名は、

いろとり月(菅原忠享)

常盤山いろどり月になりぬれば

錦をさらす心地こそすれ

菊開月 (莫傳抄)

こと草はうらかれはて、花もなし

菊咲月は花をこそみれ

紅葉月(同)

芳野山青根が峰のもみち月

時雨降り来てしられけるかな

紅葉月

たつた山まなくしぐるゝ比とてや

紅葉の月の色をそふらん

小田刈月

さびしさは鳴たつくれの露しけみ

袖打ちはらふ小田刈の月

寢覺月

いくたびかかなし枕の寢覺月

秋にはたえぬ長さ夜すから

他を批評すること(其上)

野本生抄譯

人は兎角、軽くしく、他を批判し、爲めに、自己を誤り、又、人を傷つくること多し、一度、斯かる誤りを世に吹聴せんか、其は、一種の勢力を生じ、遂に抜くべからざるに至り、頓ては、世の善惡の標準を顛倒するに至るべし。人間の性情は、複雑にして極りなし。其の一小部分をも、猶能く、精細に批判すること、誰か、容易なりとせんや。而かも、其の容易ならざるを知るの人に於て、幾何學の一形体、若しくは、一箇の花、若くは、一片の雜草に對して、軽く、其の性質を評説するを愧ぢ、却て、己が同胞に對して恰も、其のいふところに、強固なる證左の存するあるが如く、直に以つて己が憶測の批判を加ふるを常とするは、豈怪しむべきの至ならずや。

假令、吾人は、自ら、斯かる揣摩憶測を爲さず

とするも、其の相逢ふ人々の口より、其を喜び受
 け、且つ、固く、其の憶説を信ずるの傾向あり是
 れ、輕しく、人を信ずるものといふべく、亦批難
 を免かるゝこと能はざるべし。斯かる傳説を信じ
 て、其を、自己の口より出づるが如く、若くは又
 己れ、實際に、其を觀察せるが如くに装ひて、更
 らに是れを、他に吹聴するに至ては、其の危険、
 罪惡、是れより大なるはなかるべし。人、若し、
 己が名譽と信用を貸して、輕しく、他の批評に雷
 同附和して、妄りに、吹聴したる他人の惡評の多
 くは、其の原因の極めて微細にして、毫も取るに
 足らざることを知らば、必ずや、心中、慚愧に堪
 えざるべし。然れば、假令、信頼すべき強固なる
 道理の存するあるも、其を吹聴することを急ぐべ
 からず、況や、其の事の、他に對する惡評非難な

るに於てをや。トーマス、アケンビス、嘗て、其
 著の一節に此種の格言を記せり、其言最も痛烈な
 り。曰く、

謹慎の一部は、他の言ふ所は何事も信ぜざる
 に在り、而して、又、汝の聞くところは更な
 り汝の信するところをも、亦、他の耳に入る
 いことを急ぐべからず。

人の性癖は、其の性格の外面にありて明なるこ
 とあり。或は、其の行爲に於ける明白なる事實の
 上に顯ることあり。或は、又、衆人環視の場合
 に處すること多きが爲め、其の性癖を批判するの
 材料を供すること多き人あり。かゝる場合には、
 自ら、其の世評を慥むることをなさず、容易く、
 其の世評に感化せらるゝ人多し。然れば、如何な
 る場合に際しても、他の性癖行爲に關しては、一

般の世評に迷はざらんことを努めざるべからず。若し、人は是れに迷はり、已れ亦、烏合の團體の一員となりて、其を助くるに過ぎざるなり。試に、此等、理性なき團體のいふところを聞け。彼等能く誠實に他の性辟を、充分に、論評することをなすや。又人の行爲を評論するに當て、仔細に是れを討議して能く遺漏なきを得るや。彼等にして、若し、其の一部たりとも、誠實に論述するか、若しくは、又他の聰明にして公平なる人に對し、其の正しき論斷を爲すに、其の資料となるべき、指示、表言を與へんには猶、幸なり。而も、其の所説、其物は眞實なりとするも、徒らに、其を、誇大に吹聴するが爲めに、人を誤ること多きを如如せん。況んや其の論評の多くは、輕浮なる少數者の發意唱道に成れるに於てをや。

人は、單獨に、事物を批評することの謬り易きを恐る。然れど、輕々しく、世評を信じ、世論は多數の人々より成り、若しくは、成りたるが如くに見ゆるの故を以て、此種の誤り無しと思ふは、却て誤れり

我等、他人の性辟、行爲に關して、其の批評を聞くこと多し。然れど、若し、巨細に、其の評論を解剖し來れば、例令、其の評説するところは、眞摯なりとするも、其の多くは、事實探究の不完全なるが爲め、或は、推理の方法を誤れるにより、全く、謬見、過誤に陥れるを見るべし。即ち單に批評者自身の僻見、感情、若しくは、唯、其の巧妙なる架空の想像に成れるものあり、或ひは、不完全なる、他の口供を信ずるより此處に到れるものあり。又、或は、其の聞き得たる事件の顛末に

通ぜずして、毫も、精細に近き報導をも爲し、能はざる者の傳説を信ずるより此處に及びたるものあり、時としては、一般の談話に際し、何心なく、言ひ出でたることの、却て、熟考の餘に成りたるもの、如くに思ひ爲さるゝことあり、又、往々、此等種々なる原由の相合して成れるあり、而して、其の結果たるや、虚偽なる事實の陳述を基とし、彼等自らにも充分に理解し得ざる事情を妄信し、不當の方法の下に、他の性僻、行爲を論斷し去り、廣く、其を吹聴傳播し、結局、是れを、衆愚痴漢の自由に、誇張、傳播するに一任すに至るなり。」

も の 言 へ ば

く ち び る 寒 し

秋 の 風



●九重の御消息

●一兵卒の處罰を憫ませ玉ふ

先月十二日、朝

侍從 武官長岡澤中將より、近衛司令部副官を電

話にて召喚せられたるにより、何事ならんと深野

大尉は急ぎて参内したるに、本月二日、芝離宮へ

露國大公殿下御訪問のため、行幸ありたる砌り、

二重橋正門に歩哨したる兵卒の一人が、鹵簿に對

し奉り、畏憚の餘りに、敬禮の規矩を失し、處罰

せられ居ることを、今朝思し召し出させられ、憐

憫の大御心より、殊に宥免せよとの御沙汰ありた